

若手建築家による展示コラム

黒漆塗り螺旋彫り煙草入れ

—
内部 美玲

この煙草入れは、水平な線の集積というただ一つの幾何学的操作で、上から下まで全体がデザインされています。

建築家は建築物を設計する際にしばしば模型を作りますが、その中でもコンセプト模型と呼ばれる1/100や1/1000といった小さな縮尺の模型があります。それは詳細が省かれ抽象度が高い、建築物の考え方を表した模型です。この煙草入れ、私にはどこか建築物のコンセプト模型にも見えるのです。1倍でも1000倍でも、どんな大きさであっても通用する純粋な幾何学としての美しさがあるということでしょう。蓋やもち手といった部位の機能ある形を携えつつも、それらを縦断できる幾何学的操作を施すことで、一つのモノとして美しいのです。縁取りや異素材の挿入といった部位自体にデザインを施す手法ではなく、部位を含んだ全体を捉えてデザインするタウトの建築家らしい俯瞰した眼差しが感じられます。

一方で、よく観察してみると、水平な線の集積は下方ほど線の幅が広がっています。プリーツ状の布が球ボリウムにかけられて重力で自然と下に垂れているような、はたまた、水が頂部から湧き出て下へ波打ちながら流れているような、自然な状態を形にとどめたかに見える形状です。おそらく、均一な線の幅を用いたなら、外形のなめらかなカーブを表現できないだけでなく、人工的でシャープな工業製品を想起する姿になるでしょう。この温かみを感じ、手の中におさめてさわりたくなる形は、タウトの工芸作家らしいモノに対する細やかな配慮を感じさせてくれます。

黒漆によって上品に強調されたこの幾何学は、シンプルな手法のデザインを可能とする建築家としての視野の広さと、そこに愛らしさを生む工芸作家としての細やかな配慮、というタウトの2つの側面を感じられるものでした。

